

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 12 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463449

研究課題名(和文) 肺がん患者の生活調整支援モデルの有用性の検証

研究課題名(英文) Effectiveness of Life Support Model for Lung Cancer Patients

研究代表者

堀井 直子 (HORII, Naoko)

中部大学・生命健康科学部・教授

研究者番号：90410662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「肺がん患者生活調整支援モデル」について検証し、効果的な介入プログラムを提言していくことである。「肺がん患者生活調整支援モデル」の再検討を行い、介入プログラムの試案を完成させた。介入はA病院の緩和デイケアを利用している肺がん患者6名に行ったが、プログラムを完遂し追跡可能であった3名の分析をした。プログラム前後の変化では有意な変化は認められなかった。しかし、健康関連QOL尺度「SF-8」の粗点は増加していたため、今後、ケースを蓄積していくことで試案モデルの実用可能性は否定できないと考えられた。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to investigate a “life-adjustment support model for lung cancer patients” and to propose an effective intervention program. We re-examined this model and completed a draft of the intervention program. The intervention was performed in 6 lung cancer patients who had been receiving palliative day-care service at Hospital A. Of these, 3 patients who had completed the program and could go through follow-ups were analyzed. No significant change was observed between before and after the program. However, the raw score of the health-related QOL scale [SF-8] had been increased. This suggests that feasibility of this test model cannot be denied. Further accumulation of cases will be necessary in the future.

研究分野：がん看護

キーワード：肺がん患者 生活調整 介入プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)本研究の必要性

肺がんは悪性腫瘍の死亡原因の第1位を占め、進行病期で発見されることが多いという診断治療上の特徴があるため、その対策は社会的にも大きな課題となっている。

がん患者にとって、がんとともに生きるということが、病状の重症度だけでなく、病気についての本人の知覚を含め、個人の状況によって大きく影響されることが明らかにされている。

がんと共に生きる患者にとって、自らの生活をより良いかたちで調整できるように看護師が支援することは極めて重要である。

### (2)国内外の研究動向より

肺がん患者の生活に関連した国内外の研究では、生活上の障害 (Minagawa *et al.*, 2004; Prasertsri *et al.*, 2011) や心理 (Faller, 2004; Nakaya, 2008; Berendes *et al.*, 2010), QOL (Kawasaki *et al.*, 2007; John, 2010) に関する研究はある。また肺がんの適応に関する研究では心理社会的適応に関する研究がほとんどである。しかし、肺がん患者の“生活調整”全般に着眼した研究はほとんど見当たらなかった。以上より、肺がん患者が生活課題を自ら調整しながら新しい生き方を見つけていくための看護支援方法を開発することは重要である。

### (3)研究者らの研究成果と本研究の位置づけ

#### 「肺がん患者の生活調整力尺度」の開発

A県内13施設に入院、通院している肺がん患者147名(回収率49.6%,有効回答61.8%)から得られたデータを項目分析および因子分析をした結果、22項目(5因子)の「肺がん患者の生活調整力尺度(Life Adjustment Scale for Patients with Lung Cancer: L-LAS)」を作成した。信頼性は、Cronbach's 係数(=0.85)と折半法のSpearman-Brownの信頼性係数(=0.79)で確認した。妥当性については、日本語版

## Functional Assessment of Cancer

Therapy-Lung (FACT-L) 第4版 ( $r=0.64$ ,  $p<0.01$ ) および日本語版 Mental Adjustment to Cancer (MAC) scale ( $r=0.58$ ,  $p<0.01$ ) との相関によって確認し ( $p<0.04$ ) た (堀井ら; 2010)。

### 肺がん患者生活調整支援モデルの検討

“自己への肯定的評価は生活調整力に影響を及ぼし、生活調整力はQOLに影響を及ぼす”という多重指標モデルを想定し、モデルの検討を行った。適合度指標GFI(.963), AGFI(.930), CFI(.974), RMSEA(.040)であることから良好と評価された (堀井ら; 2013)。

以上より、肺がん患者生活調整支援モデルを活用し、患者の肯定的自己評価と生活調整力を高める介入を組み合わせる行うことによって、QOLの向上が期待できることが示唆された。

### (4)本研究の予想される結果と意義

これまで肺がん患者のQOLに影響を及ぼす因子として、症状(疲労、痛み、呼吸困難など)、PS、ステージ、年齢、性別、コーピングスタイル等が指摘されている。しかしこれらは、QOLの予測因子としては活用できるが、看護師による直接介入や患者本人の努力によって変化させることはできない。今回、検証する多重指標モデルでは、患者の生活調整力に介入しQOLを高めるプログラムであるため、実際的で効果的な看護介入の方向性が提言できると考える。

肺がん患者にとってはモデルに基づいた支援を受けることで、自分の生活を客観的に評価し、対処しなければならない現実の課題が認識できる。そのため、生活の中にがん体験を組み入れ、生き方の視点変更や闘病姿勢をよりよく整えることに繋がる。医療者にとっては患者が希望する生活や生き方を尊重した効果的な継続支援を可能とする。

## 2. 研究の目的

肺がん患者の看護アウトカムとしての“生活調整”に着眼し、肺がん患者が生活課題を自ら調整しながら新しい生き方を見つけ、QOLを高めていくための支援方法を開発する。そのために、研究者らが開発した「肺がん患者の生活調整力尺度(Life Adjustment Scale for Patients with Lung Cancer: L-LAS)」を用いた「肺がん患者生活調整支援モデル」に基づき、支援プログラムを作成し、有用性を検証する。

#### 《操作上の定義》

「肺がん患者の生活調整」とは、当事者が症状、治療あるいは肺がんであることによって経験している生活全般にわたる課題に対し、より安全で快適に過ごすために、状況を変化させるプロセスと定義する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 「肺がん患者生活調整支援モデル」の再検討

研究者らが構築したモデルについて、取り上げていない要因について変数を充実させ、再検討をする。

#### (2) 「肺がん患者生活調整支援モデル」による看護介入プログラムを作成する。

モデルの観測変数を成果の指標とし、文献検討、予備研究に基づきプログラムを作成する。

#### (3) 「肺がん患者生活調整支援モデル」による看護介入プログラムを評価する。

事例分析の手法を用いてプログラム参加者の経験と生活への影響を記述し、期待される変化が生じているかを評価する。

プログラムの問題点を修正し実用可能性と汎用性を高める。

### 4. 研究成果

#### (1) 「肺がん患者生活調整支援モデル」の再検討について

モデル構築時に、取り上げていない要因について変数を充実させ再検討をすること

を目的として取り組んだ。まず肺がん患者6名に対し、診断されてからの生活を自由に語ってもらう中で、新たな生活として語られた内容の分析を行った。結果、肺がん患者が新たな生活を創り出すプロセスは、病気に向かう構えを創り出し、症状・副作用による生活の不便さを感じて悪化しない対策をとっていた。また不便さが増強する経過の中で、徐々に役割の遂行ができなくなり、役割の委譲を余儀なくされる中でも今の生活が普通と思えてくるという生活感覚に変化していた。狭小化していく生活が普通と思えることへの関連要因は、病気になった自分の存在価値を見出す等の病気に向かう原動力を持ち続けること、仕事や趣味の内容を変更しながらも継続する時期に応じた人生の潤し方を見つけることであった。以上の結果を、「肺がん患者生活調整支援モデル」の変数と比較検討した結果、今の生活が普通と思えてくるという生活感覚が新たな変数として見出され、研究者らはこれを“上手なあきらめ”という「自己受容」と解釈した。

#### (2) 「肺がん患者生活調整支援モデル」による看護介入プログラムの作成について

変数に加えた「自己受容」について(沢崎; 1993、1995)を参考に研究を進め、肺がん患者の自己受容の特徴や関連要因について明かにする目的で質問紙調査を実施した。調査表は4施設に270部配布し、回収63部(回収率23.3%)、尺度の全項目に欠損のない59名分を分析対象とした。結果、肺がん患者の自己受容には診断後24ヵ月がターニングポイントであることが推測された。疾病受容には少なくとも2年は必要であることから、病気の自分をありのままに受け入れ、病気と対峙する為には、早期に症状コントロールや過去の自分を肯定的に捉える介入の必要性が示唆された。また「現在の自己」を受容するときに各領域の自己がどのように関わるかについて重回帰分析を行った結果、調整済み

決定係数.576で「身体的自己」( $r = .538$ )次いで「過去の自分」( $r = .335$ )が影響を及ぼしていることが確認できた。さらに文献検討から自己受容を高めるアプローチにおいて受容的な環境が自己受容を支える基盤になることが指摘されている。これらの結果をプログラム作成に反映させ、看護介入プログラム「肺がん患者生活調整支援モデル」の試案を作成した。その後、試案について、がん看護に関わる専門看護師および認定看護師の意見を聞いて修正した。介入を行う上で受容的な環境として緩和デイケアをフィールドに選定した。

自己受容を高めるために、症状コントロール法、体調管理ノートの活用、患者の情報ニーズへの対応、病気体験で得た利点を患者が自覚できるような関わり等、患者・家族が獲得しているコントロール感を強化できるような内容を盛り込んだ介入とした。

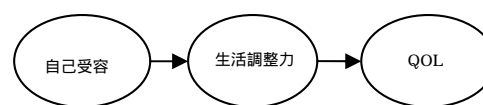
### (3)「肺がん患者生活調整支援モデル」による看護介入プログラムの評価について

A 病院の緩和デイケアを利用している肺がん患者6名に「肺がん患者生活調整支援モデル」を用いた介入を行った。また、介入の際には、“がん患者に対する問題解決療法アプローチ(2014;平井)”も適用させた。分析対象となったのは、プログラムを完遂し、フォローアップ可能であった3名であった。3名の生活の質および特異的な症状を調べるいくつかの自記式評価尺度を用いたプログラム前後の変化には、残念ながら有意な変化は認められなかった。しかし「肺がん患者生活調整尺度得点」の租点、健康関連QOL尺度「SF-8」の租点、がんに対する心理的適応評価尺度「MAC」の租点は、プログラム後は前に比して増加していたため、ケースを蓄積していくことで試案モデルの実用可能性は否定できないと考えられた。今後は、ケースの蓄積は言うまでもないが、肺がんという予後が期待できない病気の特徴から、短時間で実

施可能で、患者の現実的問題を取り扱える介入法の開発がのぞまれる。また、グループ形式で介入を行うことは、相互サポートを受けられ、孤立感の軽減にも役立つが、心理的な課題など個別の対応が難しいことが生じたため、介入形式も検討する必要がある。

### (4)研究発展に向けて

研究者らの一連の研究では、「肺がん患者生活調整支援モデル」を活用し、患者の自己受容を高める介入と生活調整力を高める介入を組み合わせることで、QOLの向上が期待できることが示唆された(下図)。



しかし、研究者らが構築した「肺がん患者生活調整支援モデル」は、肺がん患者の生活調整支援の全容を明らかにしたものではない。生活調整を支援するためには、その人の暮らしを基盤にした介入は必須であり、在宅医療・介護のネットワークや家族(介護者)も支える地域ネットワークも視野に入れ、療養者自身が必要な医療やケアを選び、生活の中に組み込んでいけるような支援が今後の課題になると考える。また、肺がんのもつ特性から、“その人が最期まで最善の生を生きる”ことを支えるエンドオブライフ・ケアの視点を加味した介入も必要と考える。そのため、肺がん療養者に対するより良い生活調整に向けた“在宅ケア介入プログラム”についても今後の研究課題としていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

堀井直子, 前川厚子: Development of Nursing Model for Life Adjustment in patients with lung cancer in Japan. Nursing & Health Sciences, 第15巻, pp 300-308, 2013年。「査読有」

〔学会発表〕(計6件)

江尻晴美, 堀井直子: Descriptions of

Respiratory Physical Therapy for Terminally Ill Patients in textbooks Used for Nursing Education in Japan . The 2nd Asian Oncology Nursing Society Conference , (ソウル、韓国), 平成 27 年 11 月 21 日 . 「査読有」

堀井直子, 江尻晴美, 杉田豊子, 前川厚子 : Life adjustment in adult lung cancer patients in Japan . The 2nd Asian Oncology Nursing Society Conference , (ソウル、韓国), 平成 27 年 11 月 21 日 . 「査読有」

堀井直子, 江尻晴美, 杉田豊子, 前川厚子 : 肺がん患者における自己受容が生活調整に及ぼす影響 . 第 29 回日本がん看護学会学術集会, パシフィコ横浜 ,(神奈川県, 横浜市), 平成 27 年 3 月 1 日 . 「査読有」

堀井直子, 江尻晴美, 杉田豊子, 前川厚子 : 肺がん患者における自己受容の特徴 . 第 29 回日本がん看護学会学術集会, パシフィコ横浜 ,(神奈川県, 横浜市), 平成 27 年 3 月 1 日 . 「査読有」

堀井直子, 江尻晴美, 杉田豊子, 前川厚子 : 肺がん患者が生活を調整するプロセス . 第 28 回日本がん看護学会学術集会, 朱鷺メッセ ,(新潟県, 新潟市) 平成 26 年 2 月 9 日 「査読有」

堀井直子, 前川厚子 : Development of Nursing Model for Life Adjustment in Patients with Lung Cancer in Japan . The 1st Asian Oncology Nursing Society Conference , 平成 25 年 11 月 22 日 - 24 日 ,(バンコク, タイ), 「査読有」

〔図書〕(計 1 件)

前川厚子編著, 在宅医療と訪問看護・介護のコラボレーション 改訂 2 版 . オーム社, 2015 年 4 月, 堀井直子執筆 pp.128-161.

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

堀井 直子 (HORII Naoko)  
中部大学・生命健康科学部・教授  
研究者番号 : 90410662

### (2)研究分担者

前川 厚子 (MAEKAWA Atsuko)  
名古屋大学・医学(系)研究科(研究院)・教授  
研究者番号 : 20314023